

櫻島地震	淺間地震	
	(ハ)	(イ)
二八〇〇	二七〇	三五〇
一五〇〇	二四〇	三五〇
四六〇〇	〇二九	二八〇
四二〇〇		

實際ニ於テハ全振幅(2a)ハ震原距離ノ反比例ヨリモ一層急速ニ減少スルコトモ有ルベク、從ツテハ櫻島地震ノ場合ノ如ク東京大阪兩地ノ觀測ヨリ算出セル M/k ナル數、即チ地震全體ノ大サニ比例スト見做スベキ數ガ一致セザルコトアルモ、要スルニ(3)及ビ(4)ナル大島近海ヨリ發セル地震ハ殆ド淺間地震(イ)及ビ(ロ)ノ三倍若クハ二倍ノ大サニ相當シ、(2)明治三十三年ノ三宅島附近ノ地震ハ更ニ大ニシテハ櫻島地震ト伯仲ノ間ニアリ、即チ此ノ程度ノ大震ガ南九州若クハ富士帶ノ如キ活動盛ナル火山脈ニ沿ヒテ時々終起シ得ルヲ示スモノトス。

第三章 豆南諸島噴火ノ歴史

一、二 伊豆諸島噴火ノ古記 大島三原山ハ淺間、阿蘇等ト共ニ本邦著名ノ火山ニシテ其ノ三原ナル名稱(八丈島ニモ三原山アリ)ハ噴孔ヲ御洞ト稱セルヨリ轉訛セルモノナルベキカ、今ヨリ千二百三十一年前、即チ天武天皇十二年十月十四日土佐國ニテ田苑五十餘萬頃ヲ陷沒セル大地震ノ夕、鳴聲ガ東方ニ於テ聞コヘタルハ伊豆大島ノ噴火ニ關スルモノナラントノ

說アリシ趣ヲ日本紀ニ記ルサレタリ、要スルニ三原山ハ往古ヨリ盛ナル破裂ヲナセルヲ以テ大島ノ名ハ當時ニ在ツテモ人ノ能ク知ル所トナリ、土佐大地震ニ際シ大島ヲ連想セルモノナランカ。

村岡博士著日本地理志料ニ大島、波布比咩命神社、在波布(今ノ波浮)港。曰波布、太后大明神、阿治古神社在野増村。曰總鎮守大宮明神。波治神社在泉津村。曰波治竈明神(葉字釜ニモ作ル)竝ニ波布比咩神ノ所生トアリ、又神津島、阿波神社在此。曰長濱明神、祀三島神、元妃阿波咩命、物忌奈命神社、稱定明神爲一島總鎮守。即阿波咩命ノ所生也トアリ、後記セル承和五年大噴火ニ關スル續日本後記ノ文ニ據ルニ同噴火ハ大島ニハ非ズシテ神津嶋ノ破裂ナルコト疑無シト思ハル。六國史中ニ載セラレタル伊豆大島若クハ他ノ豆南諸島ニ關スト思ハル、噴火ノ記事并ニ他ノ多少參照トナルベキ記事ヲ左ニ鈔出ス。

- (一) 天武天皇八年二月癸亥(十八日)(西曆六百八十年三月二十六日)如鼓音聞于東方。(日本書記)
- (二) 天武天皇八年六月辛亥(八日)(西曆六百八十年七月十二日)灰零。(日本書記)
- (三) 天武天皇十二年冬十月壬辰(十四日)(西曆六百八十四年十一月二十九日)逮于人定、大地震、舉國男女叫唱、不知東西、則山

崩河涌諸國ノ郡ノ官舎及百姓ノ倉屋寺塔神社破壞之類不可勝數由是人民及六畜多死傷之時伊豫ノ湯泉沒而不出土佐國ノ田苑五十餘萬頃沒爲海、古老曰若是地動未曾有也、是夕有鳴聲如鼓聞于東方、有人曰伊豆島西北二面自然增益三百餘丈更爲一島則如鼓音者神造是島響也。(日本書記)

按ズルニ(二)ハ彼ノ有名ナル土佐地震ノ記ニシテ、京師ニ於テ同日夕刻ニ鼓聲ノ如キ音響ガ聞コヘタルハ偶然時ヲ同フセルナラン、蓋シ是レヨリ先キ伊豆島ノ大噴火アリテ新タニ一島ヲ生成セルヲ以テ當時神造島ノ響ナリトノ説ヲ唱ヘタルナルベシ、音響ガ東方ニ聞コヘタリト有レバ伊豆島トハ伊豆七島中ニ相當スルモノナルベシ、而シテ村岡氏ノ日本地理志料ニ此時生成セル島ヲ七島中ノ一ナル新島トセラレタルモ、此ノ所謂「新島」ハ大島ノ西岸新島村野増村ノ地區ニ相當スト見ル方然ルベキガ如シ。

(一)モ或ハ同一火山ノ破裂ニ關スルナランカ(一)ノ降灰ハ九州地方ノ噴火ニ歸スベキモノナランカト想像セラル。

天武天皇十三年、即(二)ノ翌年ニハ三月ニ至リ信濃國淺間山ノ噴火アリ、西曆六百八十年乃至六百八十五年頃ニ互リ富士火山帯ノ活動時期ナリシガ如シ。但シ富士山自己噴火ノ記事ガ正史ニ現ハレタルハ約百年ノ後天應元年(西曆七百

八十一年)ニアリ。

(三)甲)承和五年七月癸酉十八日(西曆八百三十八年八月十五日)有物如粉、從天散零、逢雨不銷。或降或止。乙亥二十日東方有聲。如伐太鼓。庚辰二十五日令七大寺僧三十口。於紫宸殿限三箇日。讀仁王經一百卷。以怪異也。(續日本後紀)

(三)乙)承和五年九月甲申二十九日。從七月至今月。河内、參河、遠江、駿河、伊豆、甲斐、武藏、上總、美濃、飛彈、信濃、越前、加賀、越中、播磨、紀伊等十六國。一一相續言。有物如灰。從天而雨。累日不止。但雖似恠異。無有損害。今茲畿內七道。俱是豐稔。五穀價賤。老農名此物米華云。(續日本後紀)

(三)丙)承和七年九月。伊豆國言。賀茂郡有造作島。本名上津島。此島坐河波ノ神。是三島大社ノ本后也。又坐物忌奈乃命。即前社ノ御子神也。新作神宮四院。石室二間。屋二間。閣室十三基。上津島ノ本體。草木繁茂。東南北方巖峻峭崿。人船不到。纔西面有泊宿之濱。今咸燒崩。與海共成陸地并沙濱。二千許町。其島東北角。有新造ノ神院。其中有壘。高五百許丈。其周八百許丈。其形如伏鉢。自餘ノ雜物。燎燄未止。不能具注。去承和五年七月五日夜出。火。上津島左右海中燒。炎如野火。十二童子相接收取炬。下海附火。諸童子履潮如地。入地如水。震上大石。以火燒摧。炎揚達天。其狀朦朧。所々燄飛。其間經旬。雨灰滿部。仍召集諸祝刀禰

等。ト求其崇云。阿波神者。三島大社ノ本后ニシテ。五子相生。而後
后授賜冠位。我本后ニシテ未預其色。因茲我殊示怪異。將預冠
位。若禰宜祝等不申此崇者。出麤火將亡禰宜等。國郡司不勞
者。將亡國郡司。若成我所欲者。天下國郡平安。令產業豐登。
以上。今年七月十二日。眇望彼島。雲煙覆四面。都不見狀。漸比辰
近。雲霧盡朗。神作レル院岳等之類。露見其貌。斯乃神明之所感
也。(續日本後紀)

承和七年十月丙辰十四日奉授無位阿波神。物忌奈乃命神。竝
從五位下。以伊豆國神造島靈驗也。(同上)

按ズルニ(三、甲)ト(三、乙)トハ同一噴火ニ關スル事項ニシテ、
承和五年七月中旬ヨリ九月下旬ニ亘リ東方ヨリ鳴響ヲ發セ
ルト共ニ細微ナル噴火灰ヲ本州中部ノ諸國ニ降下セルモ
ノナリ、其ノ區域ハ西方播磨、紀伊ヨリ、北方加賀越中ニ及ビ、
東方ハ武藏及ビ房總半島ニ達セリ、但シ降灰量ハ何處モ極
微ニシテ農作物ニ損害ヲ與フルニ至ラザリシヲ以テ當時老
農ハ之ヲ米華ト稱シタリト云フ。此ノ降灰現象ハ(三、丙)即チ
承和五年七月五日(西曆八百三十八年八月二日)ヨリ始マレ
ル神津島大噴火ノ影響ナランカ、神津島ハ伊豆半島南端ヨ
リ南々西ニ當リ約十四里ノ距離ニアルヲ以テ、其ノ大噴火
ノ煙雲ハ上層氣流ノ理ニ依リ主トシテ東方ニ向フベキヲ以

テ前記諸國ノ降灰ハ僅ニ噴煙ノ餘勢ガ神津島ヨリ北方ニ散
亂セル分ニ過ギザルベキナリ。抑、神津島ノ地形タルヤ稍、
南北ニ長キ不規則形ノ一島ニシテ外縁多クハ斷崖ヲ成シ、
獨リ西南側ナル前濱ニ於テノミ小船ノ假泊スルヲ得ベク、
此ノ附近多少ノ平地アリテ即チ神津島本村ノ所在地ナリ
トス。神津島ノ地質圖ハ加藤理學士調製ノモノ本會報告第
六十三號ニ、又野田理學士ノ調製ニ係ルモノ明治四十年十
二月發行ノ地質調査所報告第二號ニ載セアリ、此ハ續日本
後記ニ、纔西面有泊宿之濱トアルニ相當ス。又同記ニ、其島
東北角有神造神院、其中有龕、高五百許丈。其周八百許丈。其
形如伏鉢トアルハ此ノ大破裂ノ結果トシテ新ニ形狀ノ伏
鉢ノ如キ一大圓錐火丘ヲ生ジタルノ謂ニシテ、現時ノ天井
山ヲ指スモノナリ、同山ハ島ノ東北部ニ在リテ海拔約五百
二十米ノ高サニ達シ、承和五年噴火ノ爲メニ成レルモノナ
ルベシ。十二童子相接取炬。下海附火。云々トアルハ鎔岩ガ
盛ニ海中ニ流入セル狀ヲ形容セルモノナリ、斯クテ噴火ハ
殆ド二年間繼續シタルナルベク、神津島鎮座ノ阿波神竝ニ其
御子物忌奈乃命ノ神慮ヲ慰メントテ承和七年ニ至リテ新ニ
神宮四院等ヲ作レルナルベク、同年十月勅命ニ依リ兩神ハ
從五位下ニ敍セラレタリ、神津島ナル名稱ハ或ハ神造島ノ

轉訛ナラント想像セラル。

(四)齊衡三年八月戊寅(八日)(西曆八百五十六年九月十六日)安房國言。天雨黒灰。從風而來。委地三四許分。(文德實錄)

按ズルニ安房國ニ降灰スルコト三四分ニ達シタルハ同國ヨリ近距離ノ噴火ニ依ルモノナルベク、蓋シ大島ノ破裂ナラシカ、但シ鳴動等ノ記事ナケレバ、強キ爆發的ノモノニ非ザリシナランカ。

(五)元慶四年二月乙未(十一日)(西曆八百八十年三月二十九日)卯時(午前六時頃)天東空中有聲一聲而止。二十三日丁未東方有聲如雷。(三代實錄)

按ズルニ或ハ伊豆諸島中ノ噴火ニ關スルモノナランカ。

(六)仁和二年八月四日庚戌。勅令安房上總等國重警不虞。先是安房國言上。去五月二十四日(西曆八百八十六年七月三日)夕有黒雲。自南海群起。其中現電光雷鳴。地震通夜不止。二十六日曉雷電風雨。已時天色晴朗。砂石粉土遍滿地上。山野田園無所不降。或處厚二三寸。或處僅蔽地。稼苗草木皆悉凋枯。馬牛食黏粉草。死斃甚多。陰陽寮占云。鬼氣御靈忿怒成祟。彼國可慎疫癘之患。又國東南將有兵賊之亂。由是豫令戒嚴。(三代實錄)

按ズルニ前文中「地震通夜不止」トアルハ噴火ノ鳴響即チ空氣ノ振動ナルベシ、降灰ノ量二三寸ニ達セル場所アリシノミナラズ、黒雲中ニ電光ヲ現ハシ雷鳴終夜ニ亘レルヲ以テ

察スルニ、噴火ハ激烈ヲ極メタルモノナルニ相違ナシ。而シテ黒雲ガ南海ヨリ起レリト有レバ蓋シ三宅島御倉島若クハ附近海中ノ破裂ナリシナランカ、三宅島ハ安房南端ヨリ南微西ニシテ約二十五里ノ距離ニ在リ。因ニ東京(大學)ト淺間山間ノ距離ハ約三十七里ナレバ前記ノ距離ヨリモ約二分一ヲ加ヘタル數ニ相當ス。而シテ淺間ノ鳴動、灰砂ハ東京附近若クハ一層遠キ銚子、水戸附近ニ達スルコトモ稀ナラザレバ、三宅島附近ノ噴火ガ房總半島邊ニ顯著ナル影響ヲ及ボスモ異トスルニ足ラズト考ヘラル。翌仁和三年ニ伊豆國獻新生島圖一張(扶桑略記)トアレバ仁和二年ノ噴火ノ結果トシテ洋中ニ一島ヲ新生セルナランカ、尤モ新島ノ名ヲ記セザレハ何レノ小島ニ當ルカヲ知ラズ、或ハ後年再ビ水底ニ埋没セルモノナルヤ審ナラズ。

一三 豆、南諸島噴火表。次表ニ新島、大島三宅、青ヶ島、八丈島等ノ豆南諸島ノ噴火ヲ列示ス、而シテ參照ノ爲メ其ノ下段ニ同ク富士火山帶ニ屬スル淺間山、富士山ノ噴火ヲモ記ルセリ、此ノ表ハ前記國史ノ記事、震災豫防調査會ノ大日本地震史料、故小鹿島氏ノ日本災異誌、中村(清二)博士ノ「伊豆大島三原火山ノ活動」ト題スル論文、八丈島廳ニ保存セル八丈嶠年表、同島浮田氏所藏ノ八丈年代記、三宅島地役所所藏ノ三宅御神火ノ記事(本會報告第七十九號)ニ據リ編成セルモノナリ。

第一表 豆南諸島噴火表 (淺間富士噴火對照ス)

時期	豆南諸島						噴火	淺間山及富士山ノ噴火
	年號、月、日	同西曆	年月日	噴火	噴火	噴火		
1'	承和五年七月五日 仁和二年五月二十四日夕	八三、八、二 八六、七、三	神津島大噴火 (本文記事參照) 三宅島(?) (本文記事參照)	天應元年七月六日(西曆七八一年八月四日)及ビ延曆十九年春夏ノ交(西曆八〇〇年二月乃至七月)富士山噴火灰ヲ雨ラス 貞觀六年五月二十五日(西八六四年七月六日)富士山大噴火、鎔岩ヲ流出ス 承平七年十一月(西曆九三七年十二月翌年一月)長元五年十二月十六日(西曆一〇三二年一月二十三日)永保三年二月二十八日(西曆一〇八三年三月二十五日)富士山噴火				
1	應德二年 天永三年十月 久壽元年十月	一〇八五、一 一一三、二、一 一一五、二、一	三宅島噴火 大島噴火、鳴動京師ニ聞ユ月ヲ踰テ止ム 三宅島噴火ス	天仁元年七月ヨリ九月(西曆一一〇八年八月乃至十月)淺間山大噴火田圃ヲ埋没ス				
2	應永二十三年八月二日 同 二十八年四月四日	一四一六、九、二 一四三、五、二四	大島噴火、海水沸騰ス					
3	應仁三年十一月十二日 長享元年十一月十三日 永正十五年正月 天文四年二月	一四九三、三、二四 一四七、三、七 一五八、二、一 一五五、三、一	三宅島噴火 八丈島神火吹出ヅ 同上五年續キテ燒ク 三宅島噴火	大永七年ヨリ天文元年(西曆一五二七年乃至一五三二年)迄ニ淺間山ハ三回ノ破裂ヲナシ、永祿三年(西曆一五六〇年)ニハ富士山ノ噴火アリ				
4	文祿四年十月二十一日 慶長十年九月十五日 慶長十一年(頃)	一五五、二、三 一六〇、二、七 一六〇、一、一	三宅島噴火 八丈島西山ヨリ神火吹出ス 八丈島洋中ニ一島ヲ湧出ス	慶長元年七月ヨリ同十年十一月(西曆一五九六年乃至一六〇五年)迄ニ淺間山ハ四回ノ噴火ヲナセリ				
5	寬永二十年二月十二日 (酉刻)	一六四三、三、三 (午後六時)	三宅島雄山噴火シ鎔岩海中ニ燒出ヅルコト十町ニ及ブ、阿古村ノ民家悉ク燒失ス但シ一人ノ死者モナカリキ、 青ヶ島噴火ス 大島大噴火(本文記事參照) 大島噴火	正保元年正月ヨリ寬文九年(西曆一六四四年乃至一六六九年)迄ニ淺間山ハ二十回ノ噴火ヲナセリ				
6	承應元年、一、一 貞享元年二月十六日 同 三月八日 正徳元年十二月二十八日 (酉ノ下刻ヨリ地震戊ノ上刻ヨリ火見ユ)	一六一、一、一 一六四、三、三 一八四、四、一 一七三、二、四	三宅島榊棠澤ヨリ噴火シ、鎔岩流チ二町程海中ニ押シ出シ阿古村ハ泥水ノ爲メ過半民家ヲ浸サル	元祿十三年(西曆一七〇〇年)ニ富士山噴火シ、寶永四年十一月(西曆一七〇七年十二月)ニ同山ノ大噴火アリ				

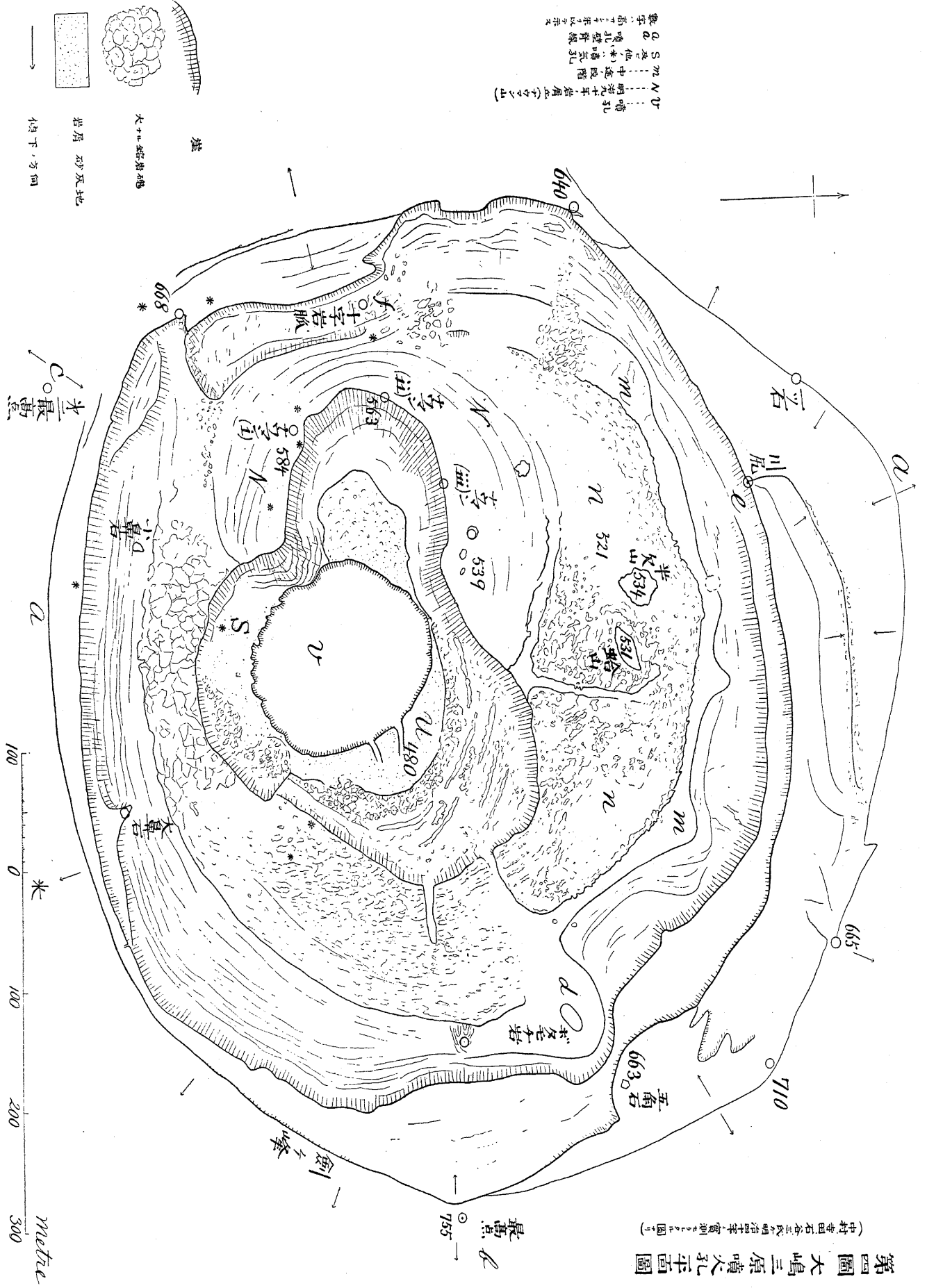
第八十一號 伊豆大島三原山噴火概報

第一表 (續) (キ)

7	8	9	10
<p>寶曆十三年七月九日夜 安永六年七月二十九日 安永七年三月二十二日 同 七年十一月十七日 同 九年六月二十七日 天明元年四月十一日 同 三年三月九日 同 五年三月十日 寛政元年</p>	<p>享保三年十月朔日 文化八年正月三日夜子刻 文政五年九月二十一日 天保六年九月二十一日 (二十日正午前ヨリ地震)</p>	<p>明治三年七月三日 (夜明ヨリ地震) 同 九年十二月 同 十三年</p>	<p>明治三十五年八月七日乃至九日 同 三十七年十一月二十八日頃 同 三十九年四月七日乃至十三日 同 四十三年十二月八日 同 四十五年三月ヨリ四月 大正元年九月十六日ヨリ 大正二年一月二十日頃 同 五年五月十六日</p>
<p>一七三、八二六 一七七 一七七、八二三 一七八、四二七 一七六、三二四 一七〇、七二八 一七六、五、四 一七三、四二〇 一七五、四二八 一七九</p>	<p>一八〇、一、一 一八四、七、三 一八六、三、一 一八〇、 一八三、一、一 一八五、二、二</p>	<p>一九〇、八七頃 一九四、二二八頃 一九〇、四、七 一九〇、二、八 一九二、三ヨリ四 一九二、九、六 一九四、二〇頃 一九四、五、六</p>	<p>三宅島山頂ヨリ噴火シ翌日阿古村地内ヨリ焼出シ、燒石焦砂ヲ多ク噴出ス 三宅島(P) 大島此ヨリ大噴火ヲ始ム 大島噴火(本文記事参照) 青ヶ島池ノ澤ヨリ噴火ス 青ヶ島噴火 同 上 青ヶ島大噴火 大島噴火</p>
<p>大島噴火シテ江戸ニ降灰ス 三宅島雄山噴火六日間震動止 大島噴火シテ三年間降灰ス 三宅島雄山噴火シ二十九日夜ニ至リテ静マル</p>	<p>大島四日間噴出 三宅島池澤ヨリ噴火熔岩流出ス、數十日ニシテ噴火ノ勢始メテ衰フ 大島噴火シ翌年ニ及ブ 北硫黄島北ノ岬ノ西方約二哩ノ海底ヨリ泥土、灰燼及ビテハ噴出ス、翌年ニ及ビテハ既ニ火燭ノ噴出ヲ見ズ</p>	<p>鳥島ノ大破裂 南硫黄島附近ニ海底噴火アリ 新島ヲ現出ス ベヨネーズ島附近ノ海底ヨリ噴火ス 大島小噴火 大島大噴火 大島大噴火 南硫黄島附近ノ海底ヨリ噴火 大島大噴火 大島大噴火、約一週間繼續ス</p>	<p>三宅島山頂ヨリ噴火シ翌日阿古村地内ヨリ焼出シ、燒石焦砂ヲ多ク噴出ス 三宅島(P) 大島此ヨリ大噴火ヲ始ム 大島噴火(本文記事参照) 青ヶ島池ノ澤ヨリ噴火ス 青ヶ島噴火 同 上 青ヶ島大噴火 大島噴火</p>
<p>寶曆四年ヨリ天明三年(西曆一七五四年乃至一七八三年)迄ニ淺間山ハ五回ノ噴火ヲナセリ、就中天明三年ノ破裂ハ非常ナル慘狀ヲ呈セル有名ノ大變動ナリ</p>	<p>享和三年ヨリ文化十二年(西曆一八〇三年乃至一八一五年)迄ニ淺間山ハ四回噴火ヲナセリ</p>	<p>慶應三年、明治二年、八年、十二年、二十二年等(西曆一八六六年乃至一八八九年)淺間山ハ數回ノ噴火ヲナセリ</p>	<p>明治四十二年(西曆一九〇九年)十二月七日以後ハ淺間ノ噴火極メテ頻繁トナリタリ</p>

上表中年月ノ記アル豆南諸島ノ噴火三十六回ヲ太陰曆一ヶ年十二ヶ月ニ配布スレバ左ノ如シ

第四圖 大嶋三原噴火孔平面圖
 (對吉田石卷成山噴火孔詳見圖一)



U 噴火孔
 N 明洞十年崖角 (字之U)
 m 中途腔隙
 S 其他噴火孔
 Q 噴火孔壁齊線
 數字: 距十米以內

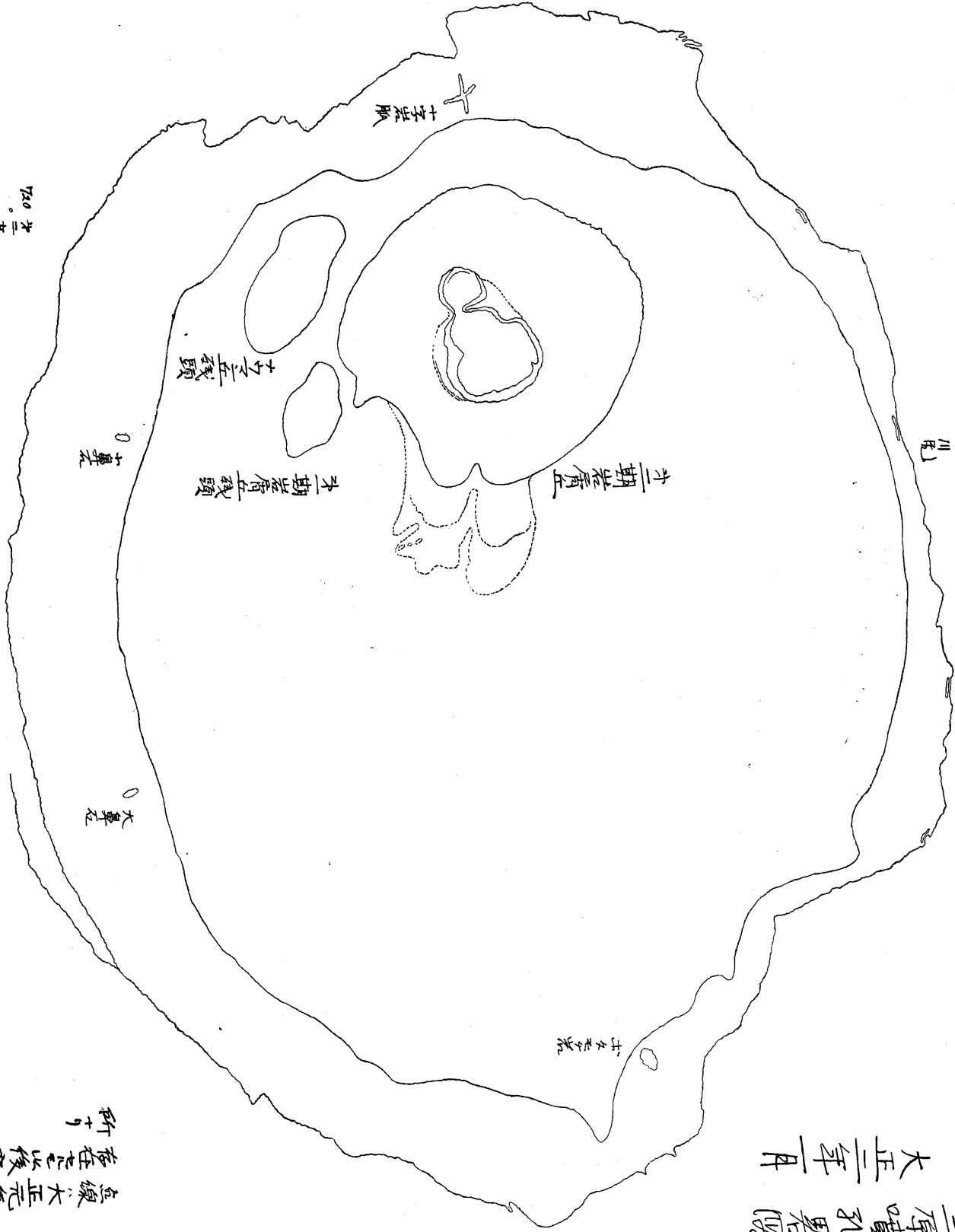
大+ 磁岩塊
 岩屑 砂灰地
 煙下, 方向

外側輪廓線ハ孔口縁ニシテ、
内側輪廓線ハ孔底周邊ナリ

北

720。北ノ高さ

100 0 100 200 300
meter



才五岡
三原噴孔畧図
大正三年甲

715。三原噴孔

近藤世實調査所技手要圖
遺線大正元年甲
存在を以て後殘念個
所ナリ

月	一月	二月	三月	四月	五月	六月
豆南諸島	一回	二回	四回	五回	三回	〇回
月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
豆南諸島	三回	四回	二回	一回	六回	五回
月	一月	二月	三月	四月	五月	六月
淺間山	〇回	六回	二回	八回	三回	三回
月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
淺間山	五回	七回	四回	一回	七回	三回

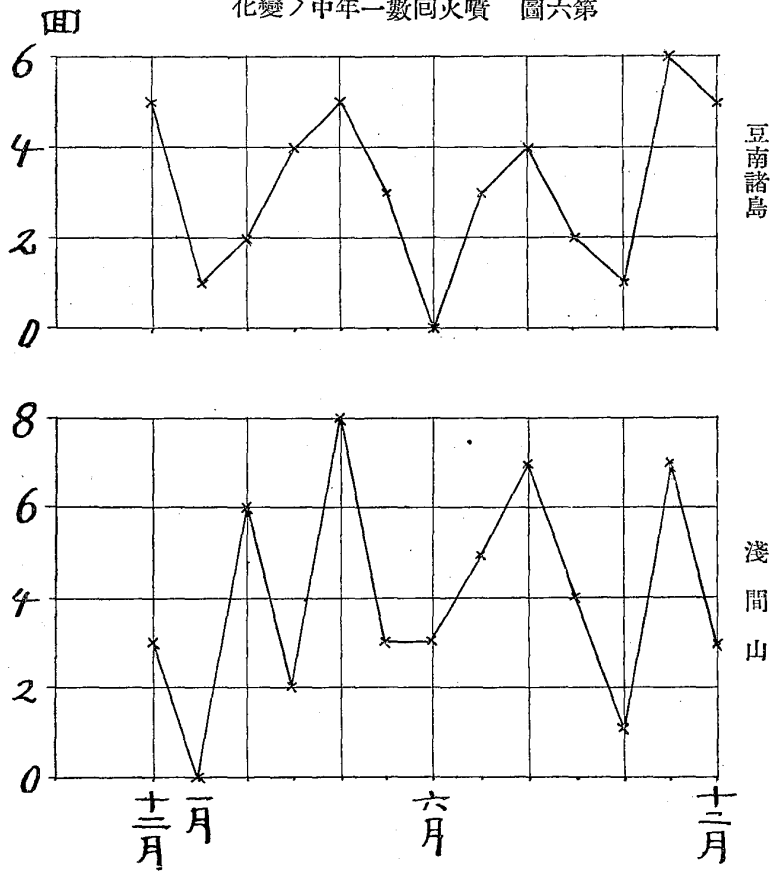
參考ノ爲メ表中ニ天武天皇十三年三月(西曆六百八十五年四月以後)明治二十二年ニ至ル迄ノ歴史ニ現ハレタル年月ノ記載アル淺間山ノ噴火四十九回ノ月別配布ヲモ示セリ。

豆南諸島ノ噴火回数ガ四月、八月、十一月ニ於テ比較的最多ニシテ一月、六月、十月ニ最少ナリシハ、淺間山噴火ニ於ケルト同一ノ特點ナリ。(第六圖參照)。

第一表竝ニ噴火記事(第一二節)ヲ通覽スルニ豆南海中即チ七島、八丈島附近ヨリ遠ク南北硫黃島ニ亘リ噴火ノ爲ニ新島ヲ湧出セルコト古來稀ナラズトス。而シテ硫黃島ノ海中、鳥島等ノ破裂ガ明治十三年以後相接シテ發起シ少ナクモ五回ニ及ビタルノ事實ニ徴スルニ明治以前ノ年代ニ於ケル其レ等ノ噴火回数ハ蓋シ少ナカラザリシナルベシ。

一四 豆南諸島噴火ノ週期及ビ相互ノ關係 豆南諸島ニシテ

第六圖 噴火回数一年中ノ變化



噴火ノ記事アルモノハ神津島、三宅島、大島、八丈島、青ヶ島、鳥島、南北兩硫黃島等ナルガ、就中、神津島、八丈島及ビ青ヶ島ハ顯著ナル破裂ヲナセルモ、第一表ノ年代、即チ九世紀以後ニ於テハ其ノ活動ハ各々一時期ニ限ラレタリ、此等ノ諸島ハ勿論今後ト雖モ噴火スルナランモ其ノ週期ガ極メテ長キモノナルニ似タリ、之ニ反シテ大島及ビ三宅島ハ古來活動ヲ繼續シテ時時強キ破裂ヲナセリ、次表ニ兩島ノ噴火年代ヲ比較シテ示ス。

第二表 大島及ビ三宅島噴火ノ比較

番 號	大島噴火ノ年、月(西曆)	三宅島噴火ノ年、月(西曆)
1	一一二二年一月(大島?)	八八六年七月(三宅島?) 一〇八五 八三八年八月 神津島大破裂
2	一四一六年九月 一四二一年五月	一四六九年十二月 一五三五年三月 一五九五年一月
3	一六八四年三月(大噴火) 一六八四年四月	一六四三年三月(大噴火) 一六五年二月 一六〇六年 一六三二年
4	一七七八年八月 一七七八年四月 一七七八年二月	一七二二年二月(大噴火) 一七六三年八月
5	一七八〇年七月 一七八一年 一七八三 一七八五 一七八八 一七八九	一六四七年二月 一六五八年二月 一六五五年二月 一六〇六年 一六三二年
6	一七八〇年七月 一七八一年 一七八三 一七八五 一七八八 一七八九	一六四七年二月 一六五八年二月 一六五五年二月 一六〇六年 一六三二年
7	一七八〇年七月 一七八一年 一七八三 一七八五 一七八八 一七八九	一六四七年二月 一六五八年二月 一六五五年二月 一六〇六年 一六三二年
8	一七八〇年七月 一七八一年 一七八三 一七八五 一七八八 一七八九	一六四七年二月 一六五八年二月 一六五五年二月 一六〇六年 一六三二年

大島噴火ノ年、月(西曆)

三宅島噴火ノ年、月(西曆)

(大噴火ノ始メ)

青ヶ島
大噴火

八丈島噴火

青ヶ島噴火

14	13	12	11	10	9
一八七六年二月 一九〇一年二月 一九二二年 一九二四年 五九三(大噴火始マル)	一八七〇年			一八二二年	
	一八七四年七月(大噴火)		一八三五年一月		一八一一年一月

大島ト三宅島間ノ距離ハ約七十五キロメートル(十九里)ニシテ敢テ遠隔ナリト稱スベキ程ニモ非ザルガ、前表ノ如ク大島ト三宅島ノ噴火活動期ハ大體ニ於テ相交互スルモノト認め得ベシ、就中(5)ノ時期ハ百七十四年間ニ亘リ三宅島ハ四回ノ噴火ヲナシタルモ大島ハ靜穩ナリキ、之ニ反シテ(8)及ビ(14)ノ兩時期ニハ大島ハ引キ續キテ破裂セルモ三宅島ハ別條ナカリキ。要スルニ近時ハ大島活動ノ時期ナリシモ其ノ終結スルニ於テハ漸次三宅島ノ活動期ニ入ルナラント考ヘラル。

八丈島ノ噴火ハ西曆千四百八十七年乃至千六百〇六年ノ百二十年ニ亘リ四回アリシモ皆ナ(5)ノ時期ニアリ、又青ヶ島ノ大破裂ハ西曆千七百八十年乃至千七百八十五年ノ五ヶ年間ニシテ(8)ノ時期ニアリ、今(5)及ビ(7)ハ共ニ三宅島大噴火ノ時期ニシテ(6)及ビ(8)ハ共ニ大島大噴火ノ時期ナリ、即チ(5)及ビ(8)

ナル時期ニ於テ夫々三宅島及ビ大島ノ大活動ニ誘起セラレテ八丈島ト青ヶ島トガ破裂ヲナセルモノナルガ如シ。而シテ青ヶ島ハ八丈島ヨリ南方ニ約十八里ヲ距ツル最近ノ火山島ナレバ(5)時期ニ於テ八丈島ノ噴火ガ終リタルニ及ビテ青ヶ島ガ活動ノ端ヲ示シ、次ギテ(8)時期ニ至リテ青ヶ島ノ大噴火トナルルハ正シキ順序ヲ示セルモノト謂フベキナリ。
三宅島及大島ノ噴火ハ多少規則正シキ週期的關係ヲ示セリ、三宅島噴火ノ年差ハ次表ノ如クニシテ

年	年數差
1874年 7月	39
1835 11	25
1811 1	47
1763 8	52
1712 2	69
1643 3	47
1595 11	61
1535 3	65
1469 12	316*
1154	69
1085	198*
886 7 (?)	

千百五十四年ヨリ千四百六十九年迄ノ三百十六年間、竝ニ八百八十六年ヨリ千〇八十五年迄百九十八年間(共ニ*ニテ記ルス)ハ一回モ噴火ノ記事無キモ、他ノ九回ノ順次年差ハ二十年ノコト一回アリシガ、餘ハ皆ナ三十九年乃至六十九年ナリキ、今兩回ノ(*)ヲ除キテ平均スレバ約五十三年ナル長サヲ得、又千八百十一年迄ノ分七回ヲ取レバ約五十九年ナル平均年數ヲ得。

大島ニ關シテハ顯著ナル噴火各時期ノ初メヲ取ルニ

(噴火ノ年月 西曆)	(年數差)
1910年 12月	34年
1876 12	55
1832	45
1777	93
1684	267*
1416 9	304*
1112 (P)	

(*)ニテ記ルセル兩年數差ハ三百年内外ニ亘ルモ西曆千六百八十四年以後五回ノ時期ハ三十四年乃至九十三年ナル年數差ヲ示シ、平均五十七年トナル。蓋シ噴火ノ週期ハ複雑ニシテ敢テ單純ナラザルハ勿論ナルガ、三宅島及ビ大島ノ噴火ハ共ニ約六十年ニ近キ週期モ存在スルヲ指示スルニ似タリ。淺間山ノ噴火ガ約六十三年ナル週期ヲ示スハ嘗テ論述セル所ニシテ(本會報告書第六十七號)豆南諸島ノ噴火モ相近キ結果ヲ與

フルモノナリト認メ得ベキカ。

富士火山帶若クハ一般ニ本邦各地諸活火山ハ同時期ニ相前後シテ破裂スルノ傾向アリ安永六年七月ヨリ天明ヲ經テ寛政四年四月ニ至ルマデ十四年六ヶ月間ハ本邦ノ有史時代ヲ通ジテ噴火作用ノ最モ盛ナリシ期間ニシテ此ノ間ニ三原山、大隅櫻島、淺間山、伊豆國青ヶ島肥前國溫泉岳等何レモ非常ノ大破裂ヲナシタリ。

又寛文元年(西曆千六百六十一年)以後ノ二十餘年間ハ富士火山帶ノ諸山ハ殆ンド全ク靜穩ナリシニ、貞享元年(西曆千六百八十四年)ニ大島ノ大破裂アリ其レヨリ二十三年ヲ經テ寶永四年十一月二十三日(西曆千七百七年十一月十六日)ノ富士火山大噴火アリタリ。享和三年十月一日(西曆千八百〇三年十一月十四日)大島噴火ノ際ハ十月二日夜ヨリ三日ニ亘リ江戸ニ降灰アリ、同十八日未刻ヨリ江戸大霧東西南北甚ダ闇クシテ人面見エズ同十九日又霧降ルコト煙ノ如クナリキ。

第一表ニ依ルニ承和五年(西曆八百三十八年)ヨリ現時迄殆ンド千百年間ニ於ケル噴火記事ハ大島ノ分十六回、三宅島ノ分十二回、青ヶ島ハ五回、八丈島ハ四回アリ、而シテ此等諸島ノ噴火ハ(1)及(1)乃至(10)ニ類別スルヲ得ベキガ、(1)ハ年代古ルクシテ記事モ完タカラザルベケレバ暫ク之ヲ除外スレバ(1)ヨ

リ(10)即チ天永三年以後ノ分ニ在リテハ、大體ニ於テ淺間山及ビ富士山ノ噴火ト同時期ニ發起セルモノト認め得ラルベキナリ、換言スレバ豆南諸島ハ相互間ノミナラズ、富士火山帶中ノ淺間山、富士山等ト噴火ノ時期ヲ等フスルモノニシテ、同火山帶ノ全般ニ亘リテ噴火活動力ノ増積スルニ及ベバ其各地點ヨリ變動ヲ發スルニ至ルベキナリ、近時ハ大島ノ外ニ淺間山、燒岳、櫻島等ノ盛ニ活動セルアリ彼ノ安永、天明、寛政ノ時代ニ於ケル状態ヲ再ビ現出シタルノ觀アリ。

一五 貞享元年ノ大島噴火 大島ハ時々噴火ヲナセルガ活動ノ特ニ盛ナリシハ天和四年(貞享元年)二月十六日(西曆千六百八十四年三月三十一日)及安永六年、七年(西曆千七百七十七年、八年)ノ破裂ニシテ貞享元年ノ噴火ハ二月十六日ヨリ二十七日迄烈シク繼續シ、山中ヨリ峰ヘ燒ケ上リ、鎔岩ハ蠟ノ如クニ海ヘ燒流レ、七八町程山ニ成レリト云フ、後年安永六、七年噴火ノトキ代官江川太郎左衛門ヨリ幕府勘定所ヘノ報告書中ニ「天和年中神火ニテ山燒ノ節峰ニ洞出來、御洞ト申傳候由、此度山燒ノ儀、右御洞ヨリ燒出、云々」トアリ、又「三原山ハ大島ノ真中ニ有之、天和四子年ヨリ元祿三年迄七ケ年ノ間山燒 節山上ニ凡拾町四方程ノ洞穴出來、今以其儘有之深サ何程可有之哉難計御座候、當七月二十九日(安永六年)暮時、右洞穴ヨリ火

氣吹出云々」トアリ、三原山中央火孔丘ハ往時ヨリ存在セルモノニシテ其ノ頂上ニ噴孔モアリシナランガ小ニシテ淺カリシナルベシ、然ルニ貞享元年ノ大破裂ニヨリテ現時ノ巨大ナル噴火孔ヲ生出シタルヲ知ルベク次ギノ安永年間ノ大破裂モ勿論同一口ヨリ發シタルナリ。

一六 安永六年、七年ノ大噴火 第一期ノ破裂ハ安永六酉年七月廿九日(西曆千七百七十七年八月廿二日)夕刻ヨリ始マリ、夜中ハ山上一面ニ火光ヲ現シ燒音甚シク、時々地震(空氣振動カ)ルベシ以下同ジ)シタリ、火山砂ハ島中二三ケ村ヘ降り、又長サ一寸乃至二三寸ノ火山毛ハ全島中ヘ降下シ、多キ場所ニテハ蜘蛛ノ巢ノ如クニ溜リタリ、而シテ八月廿五日頃迄ハ格別活動ノ異變ナク同廿七日ニ至リテハ燒音、地震共ニ休止シ灰モ降ラザリシニ、翌廿九日ニハ降雨ニ係ハラズ噴火甚シク、九月六日ノ曉ヨリハ二層破裂ノ勢ヲ増シ燒音雷ノ如ク、翌安永七戌年正月中旬比ハ火氣燒音共別シテ強カリシガ、同月下旬ヨリ噴火ハ稍鎮靜ニ向ヒタリ。

第二期 安永七年三月廿二日(西曆千七百七十八年四月廿七日)三原山御洞(噴火口)ヨリ戌亥ノ方、即チ西北ヘ燒出、テ字中ノ澤ヘ鎔岩ヲ流出セシガ泉津村ヨリ東方約半里ニ當リ村民山稼道下ニテ停止セリ、長サ約一里、幅約十間、深サ十五六間ナリシ

ト云フ。其後破裂ハ勢ヲ減ジ孔内ヨリ黒烟ヲ發シ、多少ノ噴火ハアリシモ村民等ハ五月ヨリ八月上旬迄ハ山稼ニ從事スルヲ得タリ。

第三期 同年八月下旬ヨリ噴火再ビ盛トナリ、九月十八日(太陽曆十一月六日)ニ至リ噴孔ヨリ、未申ノ方、即チ西南へ焼出シ、野増差木地兩村ノ間ナル赤澤へ幅七八間、深サ三十間程ノ鎔岩流ヲ押出シ、十一月ニ及ビテ尙ホ火氣アリ煙ヲ上ゲタリシモ道路ノ上ニテ燒止マリタレバ、通行ニハ差支ヘザリキ。赤澤鎔岩ノ流出ヨリ九日ヲ距テ、九月廿七日(太陽曆十一月十五日)ニハ噴孔ヨリ丑寅ノ方、即チ東北ニ當レル字ゴミ澤へ横幅二十餘町ニ亘リ鎔岩ヲ夥シク押出シ(第七圖第八圖ヲ見ヨ)東方海邊へ燒ケ下リ、磯ヨリ海へ約一町突キ入り水上ノ高サハ五六間ニ及ベリ。

第四期 同年十一月十七日ヨリ更ニ噴火ノ勢ヲ増シ二十一日(太陽曆十二月十八日)ニ至リテ正午頃、宗葉地釜中村清二博士ノ説ニ宗ハ字ノ誤寫ナルベシト云フ)ヨリ煙立ち、火燃出タリ。此ノ如ク安永ノ大島破裂ハ前後一年四ヶ月ニ亘リシガ大體四期ニ區別スルヲ得ベク、第一期ニハ噴火ハ盛ナリシモ未ダ鎔岩ヲ噴孔外ニ流出スルニハ至ラザリシガ、八ヶ月ヲ經テ第二期トナリテハ東北中ノ澤へ鎔岩流ヲ押出ダシタリ、是レヨ

リ七ヶ月ヲ經テ第三期トナリテハ、先ヅ西南方赤澤へ鎔岩ヲ流出シ、數日ノ後東方「ゴミ澤」へ鎔岩ノ大流出ヲナシタリ、更ニ二ヶ月ヲ經テ第四期トナリテハ既ニ鎔岩ノ流出ハ止マリシガ、東北方泉津村域内葉地釜神社ノ附近ヨリ小規模ニ噴火ヲ發シタリト見ユ。

鎔岩ノ性質ト爆發ノ強弱 安永噴火ノトキモ今回ト同ジク三原山ノ鎔岩ハ流動性多キヲ特徴トス、蓋シ此ノ性質アルニヨリテ鎔岩ハ流出スルコト容易ナルベク、從ツテ火山内部ニ閉塞セラル、蒸氣瓦斯ノ逸出ヲ妨ゲ、其ノ結果トシテ強ク爆發ヲ生ズルガ如キコト無キヲ致スモノナルベシ。

鏡端方面ニ於テハ同所ト三原ノ最低點トヲ連結セル線ヨリ以西ハ一面ノ沙原、即チ所謂沙漠ナルモ、同線ヨリ以東ハ鎔岩流下ノ地域ニシテ大小數多ノ丘トナレルアリ、鎔岩ハ牛糞狀若クハ束繩狀ニ種々屈曲セル形ヲナシ、淺間山及ビ櫻島ノ鎔岩ガ斷崖ヲナシ或ハ奇怪ナル角バリタル片塊トナレルトハ全ク趣ヲ異ニセリ。

噴孔底ノ陷落 安永大噴火ノトキ鎔岩ノ孔外ニ溢出セル量ガ甚大ナリシハ勿論ニシテ芋石火山彈モ夥ク拋射セラレ、今尙ホ三原山頂岩層層ノ中ニ多ク埋藏セラル、ヲ見ルモ、噴火勢力ノ大ナリシヲ知ルベキナリ、從ツテ安永ノ當時相應ニ巨

伊豆大島「沙漠」ノ光景

(大正二年九月二十三日森大撮影)



第三圖。三原山ヲ外輪山鏡端下ヨリ望ム

(前ハ沙漠ニシテ左方ハ永安ノ鎔岩流ナリ)



第八圖 「沙漠」ニ出ル永安ノ鎔岩流

伊豆大島三原山ノ火噴孔前ノ噴火ノ状況 (明治三十三年頃)



第三圖 三原山北壁側ヨリ噴クノ望ム



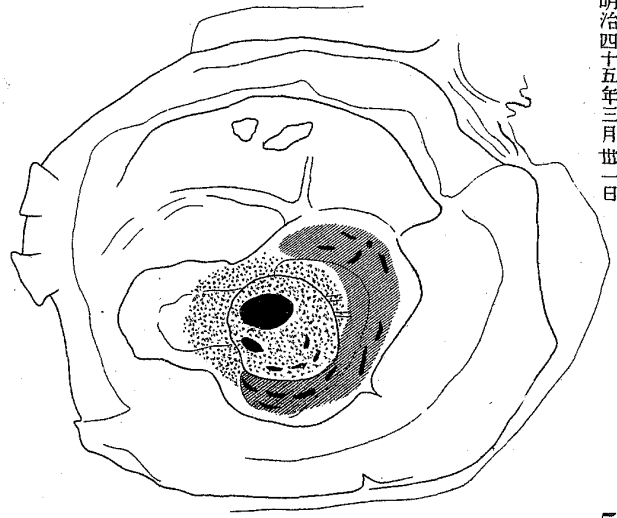
第十圖 三原山南壁方ヨリ瞰下ス (保田撮影)

伊豆大島三原山ノ噴口 第一十圖

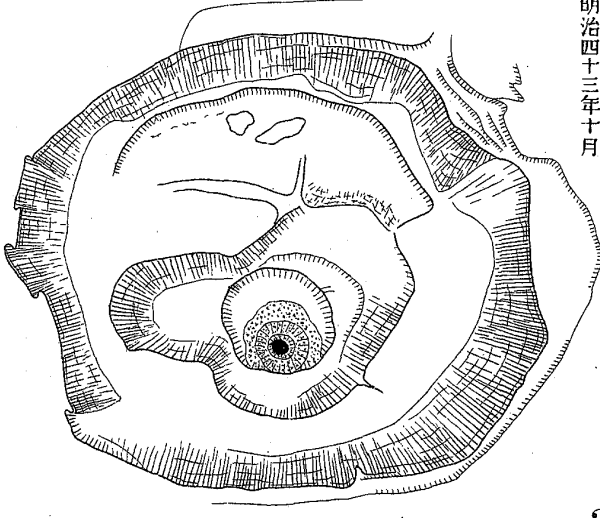
明治三十四年及四十五年第一期噴火初ニ於ケル形状ノ變化

(清水岩藏氏ノ見取圖ニヨル)

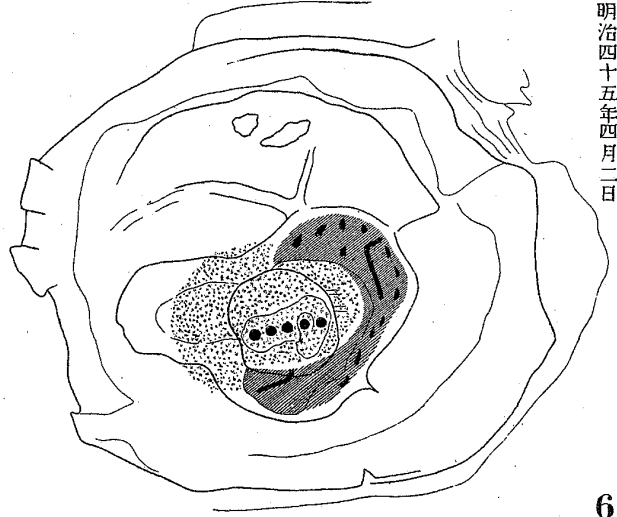
4 明治四十五年三月廿一日



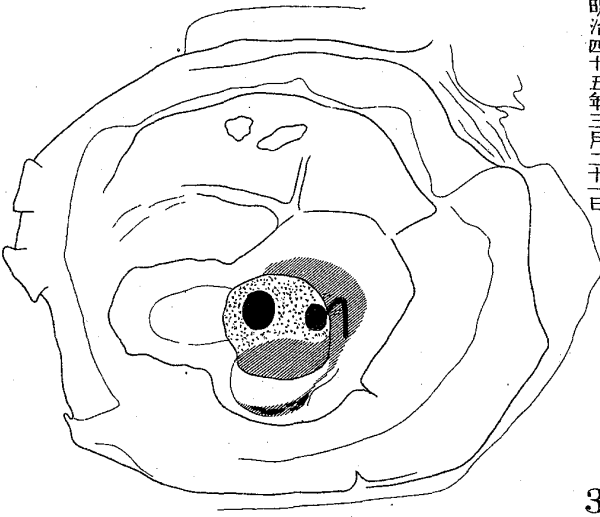
1 明治四十三年十月



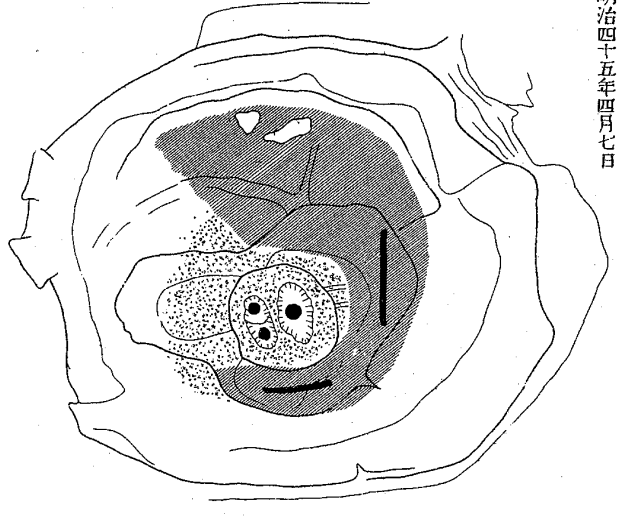
5 明治四十五年四月二日



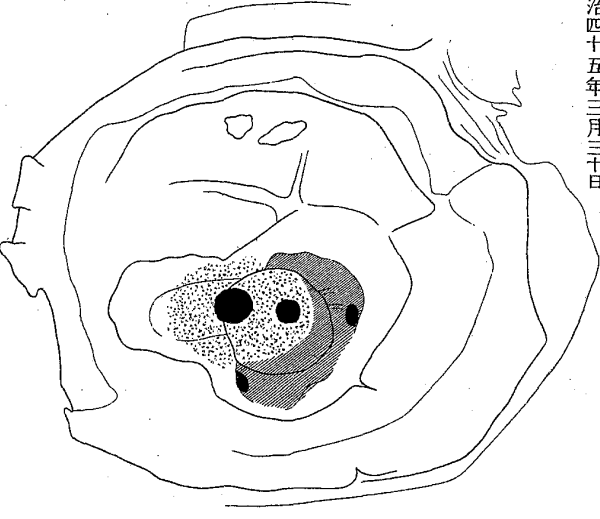
2 明治四十五年三月二十日



6 明治四十五年四月七日



3 明治四十五年三月三十日



流出セル熔岩

赤熱ノ熔岩

岩屑

大ナル岩屑丘ヲ生成セルナラント思ハル、モ爾後更ニ其ノ存在ヲ示サヰリシハ、活動ノ終熄ト共ニ孔底鎔岩層ノ大陥落アリ岩屑丘ヲ破壊シ去レルガ爲メナリト想像セラル。

一七 明治九年、十年ノ噴火 次ニ鈔出スル和田維四郎氏ノ噴火記事(學藝志林所載)ニヨルニ明治九年十年ノ噴火モ從來ノ三原舊噴火孔内平坦ナル底面ニ存セル火穴ヨリ發セルモノニシテ十二月下旬ヨリ始マリ、約一週間内外ノ日子ヲ經テ次第ニ其勢力ヲ増シ同月廿七日ニ及テ午後三時頃地震(氣振モアリシナラン)ヲ發シ、同夜始メテ山上ニ火光ヲ見ルニ至リレ、而シテ爾後二月六日頃迄約四十日間活動ヲ繼續セル結果所謂「ナウマン」岩滓丘ヲ形成スルニ至レリ、此ノ噴火發生ノ順序、竝ニ其ノ繼續日數等ハ明治四十五年及大正元、三年ノ噴火ノ場合ニ於ケルト好ク相似タリシモ、地震ハ頗ル激シクシテ十二月二十九日ノ如キハ地震ノ爲ニ幅數分ノ地割ヲ生ズルニ至リシト云フ、即チ明治四十五、大正元、三年ノ噴火ニ際シテ孔底ニ流出セル鎔岩ガ多量ナリシニ關セズ其ノ際地震トテハ殆ド一同モ無カリシトハ全ク趣ヲ異ニシタリ。

『茲ニ明治九年十二月下旬(橫濱在留ビセツト氏實驗セリ)ニハ舊噴火口内(即チ最高ノ山峰ノ中凹ナリ)全ク平坦ナル處ノ小穴ヨリ初メ僅カニ蒸煙ヲ昇騰セルノミナリシガ十二月

二十七日ニ至リ三原山ノ噴火口漸々煙炎ヲ見ルニ至レリ抑、最初余輩ノ(一月二十日)登攀セル時ハ適、噴出ノ初日ヨリ二十四日ヲ經ルニ依リ前時平坦ナリシ舊噴火口中ノ西南位ニ當リ新ニ一噴火口ヲ生ジ該口ヨリ噴出スル鎔石其口邊ニ疊積シ圓錐形ノ一小山ヲ成ヌヲ見タリシガ再度ノ(二月九日)登山ニハ新噴火口稍、其形ヲ大イニシ舊噴火口ノ壁巖三分ノ一ノ高サニ上リ最初實驗セシ所ニ比スレバ容積更ニ十倍セルヲ覺ヘタリ因テ考フルニ我輩最初登山セシ日ヨリ尋デ十五日間ハ噴火熄マズ殊ニ一月二十日後ニ於テ最モ強盛ヲ極メ二月六日ヲ以テ終ニ鎮滅セシモノタルベシ。

次ニ掲グル略記ハ大島ノ北東泉津村ノ住民小田井雄波氏ノ該地ニ在リ歷驗シテ記セルモノニ係ルヲ以テ信ト爲スニ足ルベシ

明治九年

十二月二十七日 午後三時地心ヨリ震蕩シ蒸煙騰發シ夜

間山上ニ火光映射スルヲ望ム

同 二十八日 地震ハ昨日ニ比スレバ慢シ其他前日ニ

異ナラズ

同 二十九日 激烈ナル地震ス地裂ケテ數分トナル處

アリ

明治十年

一月 四日 噴火再ビ發シ夜間映光ヲ望ム
 同 十三日 再ビ猛熾トナル
 同 十四日 微シク衰弱セリ
 同 十五日 再ビ猛烈トナル
 同 十六日 地大ニ震フ
 同 十七日 甚ダ靜穩ナリ
 同 十八日 甚ダ靜穩ナリ
 同 十九日 烈ク噴出シ火焰ヲ山巔ニ望ム
 同 二十日 同
 同 二十一日 大空紅ヲ帶ブ
 同 二十二日 同
 同 二十三日 礮然聲、噴火口ニ發シテ地震ス
 同 二十四日 同
 同 二十五日 大空紅ヲ帶ブ
 同 二十六日 同
 同 二十七日 同
 同 二十八日 靜止
 同 二十九日 靜止
 同 三十日 大空微シク紅ヲ帶ブ
 同 年
 二月 一日 山上ニ礮聲ヲ聞ク
 同 二日 靜穩

同 三日 地震ト響烈シ火焰ヲ山巔ニ望ム
 同 四日 稍靜穩大空紅ヲ帶ブ降雨ニ依テ分明ナラズ
 同 五日 同
 同 六日 甚ダ靜穩噴火全ク滅熄セシナルベシ
 同 七日 同
 同 八日 噴火最モ熾ナル日ハ終日地震動セシト云フ。
 山巔ハ即チ舊時ノ噴火口趾ニシテ其中央ノ凹處ハ訝然トシテ深サ三百尺餘ニ達シ四圍屹然環峰ヲ爲シ直徑十四五町ニ餘レリ現時ノ噴火口ハ凹處ノ西南隅ニ在リ斷壁聳立スルヲ以テ坑底ニ降ルコト能ハズ環峰上ニ立テハ斜メニ火口ヲ瞰ミ其噴火ノ狀近ク目眩ニ接スルヲ覺ユ然レドモ坑中巖石鎔解ノ狀ニ至テハ之ヲ望ム甚ダ難シ因テ環峰ヲ一周シ百方其處ヲ索メシニ西北ノ方位ニ當テ噴火口ノ一邊斜メニ毀缺セルヲ見出セリ乃チ就テ其内狀ヲ觀覽スルニ鎔石沸騰ノ景狀恰モ湯水ニ異ナラズ炎々火光ヲ發シテ左觸右突シ其環壁ニ激シ空中ニ迸ルノ勢ハ百千ノ雷霆ノ如ク又火藥ヲ以テ巖石ヲ破碎スルガ如ク其響ノ激烈ナル亦他ニ相比スベキモノナシト云フベシ大約二秒時間毎ニ轟然大鳴シテ鎔石ヲ噴投スル直立三百尺ノ高ニ達シ直下シテ復ビ噴火口ニ入ルモノ過半餘ハ口邊ニ留マル四五秒時間ヲ經テ迸裂スルモノハ其噴出殊ニ猛烈ニシテ往々大塊ヲ噴騰シテ千尺餘ノ高ニ達シ雲

間ニ入テ其跡ヲ失スルニ至ル但斯ノ如キ衝天ノ大塊ニ至ツテハ再ビ降ルモ噴火口ニハ入ラズシテ其口邊或ハ凹處ニ墜留スルヲ多シトス又噴火口中鎔石ノ表面ヲ望ムニ數々一大泡ヲ生ジテ燐爛光輝ヲ發シ一二秒時間ヲ經泡面破裂スルニ及ビ片々四方ニ飛散シ奇偉言フ可カラズ蓋シ泡中水蒸氣ヲ含蓄スルニ由テ此徵ヲ現ハスモノナルベシ加之噴火口壁モ往々其激勢ニ壞崩セラレテ漸次坑中ニ入り殆ド全小山ノ鎔解スルカト疑ハル又噴火口ニ接近セル西南ノ壁間ヨリ偶々水蒸氣ノ騰發スルヲ望メリ又凹底ヨリ(噴火口ヨリ稍遠キ處)忽然綠黃煙ノ昇騰スルヲ見タリ想フニ是レ硫黃氣ナラン。』

第四章 大島今回ノ噴火(第一期)

一八 明治四十五年、噴火前ノ大島ノ狀況 明治四十五年ヨリ大正三年ニ亘ル大島ノ噴火ハ頗ル顯著ナル變動ニシテ、素ヨリ一朝一夕ニ發起セルニ非ザルベク、其ノ數年前ヨリシテ次第ニ種々活動ノ徵候ヲ現示シ來リシナリ、即明治四十年七月初メニ大島野増村海岸ノ海水ガ白綠色ニ變ジタルコトアリ、蓋シ或ハ海底ヨリ瓦斯ノ類ヲ噴出セル爲メナルベク、當時大島々司ヨリノ照會ニ對シ本會ヨリハ七月十二日付ヲ以テ左ノ

如ク廻答シ置キタリ。

未一乙第四五四三號三ヲ以テ本月八日付ケニテ御照會ニ相成リ候大島野増村海岸ノ海水白綠色ニ變ジタル件ハ海底ヨリ瓦斯或ハ水ヲ噴出セルノ類ニテ格別ノ事ニ無之トハ存ジ候得共、近日本會ヨリ臨時委員理學博士中村清二及ビ囑託員寺田寅彦ノ兩名大島ニ出張致シ候ニ付右ノ個所ヲ調査致スベク候間右様御了知相成度此段及御廻答候也

之レト前後シテ明治三十八年六月五日并ニ明治四十二年一月十六日強震ヲ發シテ大島ヲ震動シタルガ前者ハ大島ノ西北海底ヨリ起リテ同島西部ノ元村、野増村并ニ東北部ノ泉津村ニ於テ多少ノ損害ヲ與ヘタルモ、島ノ南部波浮、差木地ハ別條ナカリキ、之ニ反シテ後者ハ大島ノ南方海底ヨリ起リテ、波浮、差木地ニ於テハ幾分ノ震害ヲ生ジタルモ、島ノ北部地方ハ別條無カリキ、要スルニ此等兩回地震ノ起原ハ共ニ極メテ大島ニ接近シ、其ノ島裾ニ存セルモノニシテ、即チ火山性地震ニ屬シ明治四十五年以後ノ大島大噴火ノ前驅現象ナリシト認ムベキナリ、蓋シ將ニ大噴火トナリ鎔岩ヲ吐出セントスルモ噴孔底閉塞ノ爲メ山下ニ裂罅ヲ生ジテ爰ニ強震トナレルモノナルベシ、尚ホ明治四十一年十二月二十八日ニハ箱根山強震アリ、同年五月二十六日ニハ淺間山ノ強震アリタルノ事實ニ徵スル